電力大消費地である首都圏住民への地層処分事業に対する理解促進活動

—お台場はるか沖埋立地にガラス固化体を—

Diffusion and Uptake Activity on High revel radioactive waste disposal project for Metropolitan area residents of big power-consuming area.

－Vitrified radioactive waste disposal in Odaiba far off reclaimed island.－

*三谷　信次[1]、半谷　輝己[2],
[1]原子力コミュニケィションズ，[2]リスクコミュニケーションジャパン

過去に首都圏で発生した産業廃棄物は、地産地消の考え方から同じ首都圏に埋設処分しうまく解決してきた。同じ考え方から首都圏で過去に大量に消費した電気から発生した「核のゴミ」も同じ首都圏の科学的特性マップのグリーンの地域に埋設出来ないか机上検討した。これを基に首都圏住民の特に若い世代と対話し地層処分に対する理解を深めることで、過疎地域からの地層処分地立候補が容易にできないか検討を始めた。

キーワード：地層処分、理解促進活動、You-Tube、ガラス固化体、お台場

1. 緒言

NUMO—原子力文化財団の募集した地層処分研究施設見学について、団体や組織の人ではなく Facebook を通して関心の高い人達を募集した。原子力に比較的批判的な人達が多い一般人が集まってきた。このメンバーは一昨年は瑞浪深地層処分研究施設を訪問し、地層処分の技術的課題は概ね理解し、現世代で処分を始めるべしと結論した。同じメンバーで昨年六ヶ所再処理施設を訪問した。訪問後処分地はどこにするかが議論になり、首都圏の東京湾の埋立地を候補に立て「文献調査」を開始すべしとの提案をしてきた。

2. 方法

今年の主題は処分地の議論に絞られ、過去に一番多くの電力を使った首都圏住民が「核のゴミ」の処分について、当事者意識を持って首都圏内で地産地消すべきと主張。江戸時代から当時の庶民は生活で出たゴミはリサイクルし、最後に残ったゴミを江戸湾に埋設しその他の土砂とも合わせて埋立地を増やしてきた。明治時代から東京になっても埋立地は拡張され、昭和の時代には江東区の「夢の島」に東京 23 区のゴミトラックが押し寄せるに及び有名な「ゴミ戦争」が起きた。このとき東京都民は地産地消の認識に立ち返り、23 区それぞれに焼却炉を備えた清掃工場を作り、残った焼却ゴミだけが今でも埋立地に運ばれている。そこで私達は「核のゴミ」と言われている「高レベル放射性廃棄物」に対しても同様の認識に立ち、六ヶ所再処理施設でリサイクル処理された焼却ゴミに該当する残滓の「ガラス固化体」を、お台場はるか沖埋設地の地下３５０ｍの岩盤の奥深くに埋設するという発想をした。そのときの議論の内容を動画に収め Youtubu[1]に掲載した。今年３月から６月までのアクセス数は 400 余であった。I

3. 結論

今後は首都圏在住の将来を担う若い人達とこの件について対話し、「NIMBY(Not in my backyard)」を自分事としてどう捉えるかお互いに良く議論し、過去に実行してきた江戸庶民、昭和の都民に恥じない令和の提案ができないかと思っている。提案は始めたばかりだがこのような活動が広がり、全国規模で地層処分に対する話が盛り上がっていくことで、過疎地域からの処分地立候補が容易になることを期待したい。

[1] 動画、ミッドナイトラボ　https://www.youtube.com/watch?v=UUjiHLp-juk&t=

*Shinji Mitani [1], Terumi Hangai[2]
[1]Nuclear Communications., [2]Risk Communication. Japan